

# 張籍詩訳注(8)

——「牧童詞」「沙堤行呈裴相公」——

畑村 学  
橋 英範

## The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (8)

Manabu HATAMURA  
Hidenori TACHIBANA

### はじめに

本篇には、15「牧童詞」・16「沙堤行呈裴相公」(ともに中華書局『張籍詩集』巻一)の訳注を掲載する。なお、本稿より李建崑校注『張籍詩集校注』(以下、李建崑注と称する。華泰文化事業公司、二〇〇一年)を参照する。

### 訳注

#### 15 牧童詞

#### 【題解】

牛飼いの少年のうた。同題の詩が、張籍以前では儲光羲に一首(『全唐詩』巻一三六)、張籍より後では李涉に一首(同巻四七七)ある。また、張籍以後であるが、盧肇、劉駕に「牧童」と題する詩がある(それぞれ同巻五五一、巻五八五)。これら「牧童」詩の系譜における張籍の詩の特徴については、特に張籍が詩を作る際に参照したと考えられる儲光羲の詩と比較して、

【補】のところで考察する。  
なお、この「牧童詞」は、郭茂倩『樂府詩集』には樂府題として載録されていない。

#### 【本文・書き下し文】

- |           |                  |
|-----------|------------------|
| 1 遠牧牛     | 遠く牛を牧す           |
| 2 逸村四面禾黍稠 | 村を遶って四面 禾黍稠し     |
| 3 陂中飢鳥啄牛背 | 陂中 飢えし鳥は 牛の背を啄み  |
| 4 令我不得戲壠頭 | 我をして壠頭に戯むるを得ざらしむ |
| 5 入陂草多牛散行 | 陂に入りて草多く 牛 散行し   |
| 6 白犢時向蘆中鳴 | 白犢 時に蘆中に向いて鳴く    |
| 7 隔堤吹葉應同伴 | 堤を隔て 葉を吹きて同伴に応じ  |

二〇〇二年十二月二十五日受理

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科講師  
橋 英範 岡山大学文学部言語文科学科助教

- 8 還鼓長鞭三四聲 還た長鞭を鼓す 三四声  
 9 牛群食草莫相觸 牛群れて草を食む 相觸るる莫かれ  
 10 官家截爾頭上角 官家 爾が頭上の角を截たん

【押韻】

- 牛・稠—下平—一八尤 頭—下平—一九侯 (通押)  
 行・鳴—下平—一二庚 声—下平—一四清 (同用)  
 觸—入声—三燭 角—入声—四覺 (通押)

【口語訳】

- 1 遠くまで牛を放牧しに行く
- 2 村を囲む四方には いねやきびが茂っている (牛が食べたらいへんだ)
- 3 水辺の岸には飢えた鳥がおり それが牛の背をつつくため
- 4 私は丘の上で遊んでもいられない
- 5 岸辺に入ると草が多く茂り 牛たちはあちこちと歩き回り (その草を食べ)
- 6 白い子牛は 時に蘆のしげみで鳴き声をあげる
- 7 土手を隔てて 草笛を吹いて牛飼いの仲間に合図しながら
- 8 また 長い鞭を撃って 三、四回 音を鳴らす
- 9 牛たち 群がって草を食べてるけど お互い角をぶつけちゃだめだよ
- 10 お役人が お前たちの頭の角をちょんぎってしまうよ

【語釈】

1・2 遠牧牛、遶村四面禾黍稠

「遠牧牛」遠くの餌場まで牛を放牧しに出かける。「牧牛」は、唐代以前の詩文に用例が見当たらない。唐詩では、張籍以前に二例用例があり、張説「冬日見牧牛人担青草帰」(『全唐詩』巻八六)は、詩題に「牧牛」の語が見え、錢起「流陽古渡作」(『全唐詩』巻二三六)に、「牧牛避田燒、退鷁隨潮風」(牧牛は田燒を避け、退鷁は潮風に隨う)とあるのは、夕刻に餌場から戻ってくる牛の様子を詠じている。【題解】で触れた李涉「牧童詞」には、「朝牧牛、牧牛下江曲。夜牧牛、牧牛度村谷」(朝に牛を牧し、牛を牧して江曲に下る。夜に牛を牧し、牛を牧して村谷を度る)とある。

「遠牧」も、唐代以前の用例が見当たらない。『全唐詩』にもこの一例のみ。儲光羲「牧童詞」に、「不言牧田遠、不道牧陂深」(言わず 牧田遠しと、道

わず 牧陂深しと)と、餌場が「遠」いとあり、3句に出てくる「陂」も見える。

「遶村」「遶」については、13「猛虎行」(巻二)【語釈】参照。

「四面」村を取り囲んでいる四方。田畑が村を囲むように広がっていることをいうのである。「四面」は詩文に頻出することば。阮籍「詠歌詩十七首」其九(『文選』巻二二)に、「五色曜朝日、嘉賓四面會」(五色 朝日に曜き、嘉賓 四面に會す)とある。

唐詩にも多くの用例がある。杜甫に一例、「自瀼西荆扉且移居東屯茅屋四首」其一(『詳注』巻二〇)に、「平地一川穩、高山四面同」(平地 一川穩かに、高山 四面同じ)とある。張籍にこの他四例、218「寒食内宴二首」其一(巻四)に、「朝光瑞氣滿宮樓、綵纛魚龍四面稠」(朝光の瑞氣 宮樓に満ち、綵纛の魚龍 四面に稠し)とあるのは、「稠」とともに用いられており、また221「太白老人」(巻四)に、「春泉四面遶茅屋、日日唯聞杵臼声」(春泉 四面 茅屋を遶り、日日 唯だ聞く 杵臼の声)とあるのは、「遶」とともに用いられる例である。

「禾黍稠」稲と黍が豊かに実っている。「禾黍」は稲と黍。『毛詩』王風「黍離」序に、「黍離、閔宗周也。周大夫行役、至于宗周。過故宗廟宮室、尽為禾黍」(黍離は、宗周を閔むなり。周の大夫 役に行き、宗周に至る。故の宗廟宮室を過ぐれば、尽く禾黍と為る)とある。宮殿が荒廢し、今は畑となつてしまったと言うなかに「禾黍」が見える。『史記』宋微子世家所引の歌謡(微子之歌)に、「麥秀之漸漸、禾黍之油油」(麥秀の漸漸たり、禾黍の油油たり)と見えるのも、先の「黍離」の詩と同様、跡形もなくなった宮殿の様子を表現するなかに見える。

唐代以前の詩では、古樂府「戰城南」(『樂府詩集』巻一六)に、「何以南、何北。禾黍不穫君何食」(何を以て南し、何を以て北するや。禾黍 穫られずして 君 何をか食らわん)とあるが、これ以外の用例はほとんどない。唐詩には常見の語。陳注に引く儲光羲「田家雜興八首」其一(『全唐詩』巻一三七)には、「閑時相顧笑、喜悅好禾黍」(閑時 相顧みて笑い、喜悅す 好き禾黍を)とある。

杜甫に二例、「羌村三首」其二(『詳注』巻五)に、「賴知禾黍收、已覺糟牀注」(賴いに知る 禾黍の收めらるるを、已に覺ゆ 糟牀の注ぐを)とあり、「遣興三首」其三(『詳注』巻七)に、「耕田秋雨足、禾黍已映道」(耕田 秋雨足り、禾黍 已に道に映ず)とある。

張籍にはこの他に六例があり、414「隴頭行」(巻七)に、「驅我辺人胡中去、恣放牛羊食禾黍」(我が辺人を驅りて胡中に去らしめ、恣に牛羊を放して禾黍を食らわしむ)とあるのは、せつかく栽培した禾黍を胡人が牛や羊に食べさせると言う。また、448「懷友」(巻七)に、「空知為良田、秋望禾黍熟」(空しく知る 良田を為り、秋望 禾黍熟せるを)とあり、良田に稲や黍が実るさまが詠われている。

「稠」は多いの意。詩文に普通に使われることばで、張籍にはこの他三例あり、218「寒食内宴二首」其一(巻四)に、「朝光瑞氣滿宮樓、綵纛魚龍四面稠」(朝光の瑞氣 宮樓に満ち、綵纛の魚龍 四面に稠し)とあるのは、この詩と同じく「四面」とともに用いられている例である。

この二句は、村で栽培している稲や黍を牛が食べないように、牧童が遠くの餌場まで牛を放牧しに出かける様子を詠う。

### 3・4 陂中飢鳥啄牛背、令我不得戲壠頭

〔陂〕沢の岸辺。『毛詩』陳風「沢陂」に、「彼沢之陂、有蒲与荷」(彼の沢の陂、蒲と荷と有り)とあり、毛伝に「陂、沢障也」(陂は、沢障なり)、正義に「沢障、謂沢畔障水之岸」(沢障は、沢畔 水を障ぐの岸を謂うなり)と言う。徐注では、牛の餌となる水草の生えている場所と説明する(沢辺の陂岸有水草之处)。儲光羲「牧童詞」に、「不言牧田遠、不道牧陂深」(言わず 牧田遠しと、道わず 牧陂深しと)と、「牧陂」の語が見える。

〔飢鳥〕腹を空かせた鳥。唐代以前の用例は見当たらない。唐詩には数例見え、岑参「阻戎瀘間群盜」(『校注』巻四)、「餓虎銜鬪體、飢鳥啄心肝」(餓虎 鬪體を銜み、飢鳥 心肝を啄む)とあり、「啄」と一緒に用いられている。杜甫には用例がない。

全唐詩・静嘉堂本・叩彈集・四庫本は、「飢鳥」(飢えたからず)に作るが、その場合でも古い用例は見当たらない。唐詩では初唐の頃から用例が見え、沈佺期「被試出塞」(『全唐詩』巻九六)には、「飢鳥啼旧壘、疲馬恋空城」(飢鳥 旧壘に啼き、疲馬 空城を恋う)とある。

杜甫には同様の意味の「饑鳥」が三例あり、例えば「晚行口号」(『詳注』巻五)には、「落雁浮寒水、飢鳥集戍樓」(落雁 寒水に浮かび、飢鳥 戍樓に集まる)とある。張籍と同時代の孟郊「飢雪吟」(『校注』巻三)には、「飢鳥夜相啄、瘡声互悲鳴」(飢鳥 夜 相啄み、瘡声 互に悲鳴す)と、「啄」と一緒に用いられる例が見える。

張籍自身の用例は「飢鳥」「飢鳥」のいずれの場合でも、この一例のみ。

〔啄牛背〕牛の背中をつつく。「牛背」は、唐代以前には用例が見当たらない。唐詩にもここも含めて二例見えるのみであり、もう一例は、同時代の元稹「当来日大難行」(『元稹集』巻二二)に、「大牛堅、小牛横。鳥啄牛背、足跌力憊」(大牛堅ち、小牛横たわる。鳥は牛の背を啄み、足跌き力憊し)と見え、鳥が牛の背中をつつくというところで、このこと字の並びが同じである。

〔壠頭〕丘の上。牛が草を食べている「陂」を見下ろす高い場所を指す。「頭」は場所を表す語に付く接尾辞。静嘉堂本・叩彈集・唐詩品彙・四庫本・名家集は「隴」に作るが、意味は同じ。

この二句は、腹を空かせた鳥が大事な牛の背中をつついて傷をつけるために、牧童は丘の上で遊んでもいられないと詠う。

### 5・6 入陂草多牛散行、白犢時向蘆中鳴

〔散行〕それまでひとかたまりになっていた牛が、餌場にたどりついて思い思いに散って行く。『管子』国蓄に、「斂積之以輕、散行之以重」(之を斂積するに輕を以てし、之を散行するに重を以てす)とあるのは、分け与える、売りさばくという意味で用いられており、ことやや異なる。このこと同じような意味では、唐以前の詩文に用例は見当たらない。

唐詩にはここ以外に四例見え、いずれも王建や賈島など、中唐以降の用例である。同時代の王建「哭孟東野二首」其一(『王建集』巻九)に、「自從東野先生死、側近雲山得散行」(東野先生の死して自從り、側近の雲山 散じ行くを得たり)とあり、雲がちりぢりになる様子を表現しており、張籍の表現と類似する。

〔白犢〕白い子牛。『列子』説符篇に、「宋人有好行仁義者。三世不懈。家無故黑牛生白犢。以問孔子。孔子曰、「此吉祥也。以薦上帝」(宋人に好んで仁義を行う者有り。三世 懈らず。家故無くして黒牛 白犢を生む。以て孔子に問う。孔子曰く、「此れ吉祥なり。以て上帝に薦めよ」と)とある。ここでは黒牛が生んだ白犢が吉祥として記されている。

六朝期の詩には用例が見当たらない。類似した「白牛」の語が、梁簡文帝「和贈逸民詔詩十二章」其七(『文館詞林』巻一五八)に、「金輪宝印、丹

枕白牛（金輪 宝印、丹枕 白牛）とあるが、ここでの白牛は、大乘の比喩として用いられるようである。

唐詩では、張籍以外に一例、李白「田園言懷」（王注本卷二四）に、「何如牽白犢、飲水對清流」（何ぞ如かん 白犢を牽き、水を飲ませ清流に対する）とあり、隱遁生活の憧れを詠じたなかに見える。

「犢」は、張籍13「猛虎行」（卷一）の「黃犢」の【語釈】で説明したように、普通「黃」字を伴って「黃犢」と表現される。

杜甫には「白犢」はないが、先に述べたように、仏教と関わる「白牛」が、「上兜率寺」（『詳注』卷一二）に、「白牛車遠近、且欲上慈航」（白牛 車遠近、且つ慈航に上らんと欲す）と見える。唐詩中の「白牛」は、仏教との関わりで用いられる場合が多いようだ。

張籍より後の詩人であるが、司空圖「涪陽渡」（『全唐詩』卷六三三）に、「楚田人立帶殘暉、馭迴村幽客路微。兩岸蘆花正蕭颯、渚煙深處白牛歸」（楚田 人立ちて 殘暉を帯び、馭迴り村幽にして 客路微かなり。兩岸の蘆花 正に蕭颯とし、渚煙の深き處 白牛歸る）と「白牛」が見え、この場合は、農村の夕景の一部として白牛が詠われている。

「蘆」あし。水辺に自生する植物。同じ「向蘆中」の字の並びが、岑參「漁父」（『校注』卷一）に、「朝從灘上飯、暮向蘆中宿」（朝に灘上に従りて飯し、暮に蘆中に向いて宿す）と見える。

この二句、やっと思つたら、今度は子牛が迷子になることを詠う。また、草むらの緑と牛の白という色彩の対比も意識した表現であろう。

#### 7・8 隔堤吹葉應同伴、還鼓長鞭三四聲

〔隔堤〕堤を隔てて。特別なことばではないが、唐代以前の古い用例および唐詩の用例が見当たらない。

〔吹葉〕草笛を吹く。「風が葉に吹き付ける」という意味で用いられるのが普通で、唐詩の用例もそうした例ばかりである。ここに近い表現として、李陵「答蘇武書」（『文選』卷四一）の李善注所引傅玄「筋賦序」に、「吹葉為声」（葉を吹きて声を為す）とある。

なお、「吹葉」は、後世は二字の熟語で楽器（吹奏楽）の意味をあらわすようになる。

〔同伴〕同じ牛飼いの仲間。『孔子家語』困誓に、「吾之所伐者、不過四五人矣」（吾の伐つ所の者は、四五人に過ぎず）とあり、三国魏の王肅注に、「本与叔孫同伴者也」（本 叔孫と同伴する者なり）という。詩では、唐代以前に用例が見当たらない。

唐詩にはこれ以外に八例あるが、いずれも中唐以降の用例である。王建「傷墮水鳥」（『王建集』卷九）に、「眼見行人車轍過、不妨同伴各東西」（眼のあたりに見る 行人 車轍 過ぎ、同伴 各おの東西なるを妨げざるを）とある。

〔鼓長鞭〕長い鞭を撃つ。「鼓」は「鼓」に同じ。唐詩品彙・四庫本は「鼓」に作り、叩弾集の校語に「一作鞞」と言う。「鞞」は弓を張る。ここでは鞭をぴんと張るという意味になろうか。

「長鞭」は長い鞭。唐代以前の用例は数少ない。張華「輕薄篇」（『樂府詩集』卷六七）に、「横響刻玳瑁、長鞭錯象牙」（横響 玳瑁を刻み、長鞭 象牙を錯す）とある。唐詩にはここ以外に十例、馬を駆る鞭の意味で使われる例が多い。高適「詠馬鞭」（『全唐詩』卷二二三）に、「龍竹養根凡幾年、工人截之為長鞭」（龍竹 根を養うこと 凡そ幾年、工人 之を截ちて長鞭を為る）とある。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

〔三四声〕鞭をびしっびしっつと三、四度鳴らす。「三四」の用例は、唐詩に多く見られる。「三四声」の並びでは、高適「送別」（『全唐詩』卷二二三）に、「曙鐘寥亮三四声、東隣嘶馬使人驚」（曙鐘 寥亮として 三四声、東隣の嘶馬 人をして驚かしむ）とあり、同じ高適の「送渾將軍出塞」（『全唐詩』卷二二三）にも、「城頭面角三四声、匣裏宝刀昼夜鳴」（城頭の面角 三四声、匣裏の宝刀 昼夜に鳴る）とある。

〔三四〕は、杜甫の詩句には用例がない。張籍にはこの他に一例、5「野老歌」（卷一）に、「老翁家貧在山住、耕種山田三四畝」（老翁 家貧しくして 山に在りて住み、耕種す 山田 三四畝）とある。

陳注では、この二句について、「写牧童之状如画」（牧童の状を写して画の如し）と、その絵画的な表現を評価している。

この二句は、仲間と草笛を吹きあつて楽しみながらも、やはり牛の様子を気にかけている牧童の様子を詠じている。「葉を吹く」は、あるいは、牛飼

い仲間と連携して、牛を一つの方向や場所に追い立ててゆくための草笛かもしれない。ここでは、張籍が踏まえたと考えられる儲光羲「牧童詞」に、「同類相鼓舞、触物成謳吟」(同類 相鼓舞し、物に触れて 謳吟を成す)と、仲間同士で歌を歌い合うとあることから、前者の方向で解釈した。

### 9・10 牛羣食草莫相触、官家截爾頭上角

〔牛群〕牛が群れをなす。特に出典のあることばというわけではないが、二字の並びでは唐代以前の詩や唐詩に用例が見当たらない。

全唐詩・叩彈集は「牛牛」に作り、静嘉堂本・唐詩品彙・四庫本は「牛羊」に作る。

「牛牛」は、唐代以前の詩や唐詩に用例が見当たらない。徐澄宇『張王樂府』は「牛群」と「牛牛」を比較して「牛牛」の方が正しいとし、「牛牛」置字は口語化的楽府本色」と説明する。

「牛羊」であれば、早く『毛詩』に見え、六朝の詩にも比較的用例が多い。

「大雅」行葦に、「敦彼行葦、牛羊勿踐履」(敦たる彼の行葦、牛羊 踐履すること勿れ)とあるほか、二例見える。六朝詩では、王微「雜詩」(『文選』卷三〇)に、「日開牛羊下、野雀滿空園」(日開れて 牛羊下り、野雀 空園に滿つ)とある。

唐詩にも用例が多く、王維「渭川田家」(趙殿成注本卷三)には、「斜光照墟落、窮巷牛羊歸。野老念牧童、倚杖候荆扉」(斜光 墟落を照らし、窮巷 牛羊歸る。野老 牧童を念い、杖に倚りて荆扉を候つ)とあるように、「牧童」とともに見える。

杜甫にも四例見え、「返照」(『詳注』卷二〇)に、「牛羊識僮僕、既夕応伝呼」(牛羊 僮僕を識り、既に夕べにして伝呼に応ず)とある「僮僕」は、「牧童」と同じ羊や牛を飼う少年のことであると考えられる。

張籍自身にもここ以外に四例見られる。「禾黍」のところでも引いた張籍414「隴頭水」(卷七)に、「驅我迎人胡中去、散放牛羊食禾黍」(我が迎人を驅りて胡中に去らしめ、恣に牛羊を放して禾黍を食らわしむ)とある。

「牛群」であれば「莫相触」と対応するので意味の通りはよいが、それはそのまま字句が改められた根拠にもなり得る。「牛羊」が、他の二者と比較して詩語としては最も安定しているが、ただ、詩の前半に牛しか出てこないのに、ここにきて羊が一緒に出てくるのは不自然に感じられる。

〔食草〕草を食べる。『莊子』馬蹄篇に、「夫馬、陸居則食草飲水、喜則交頸相靡、怒則分背相踶」(夫れ馬は、陸に居りしときは則ち草を食らい水を飲

み、喜べば則ち頸を交して相靡し、怒れば則ち分かれ背きて相踶せり)と、馬が草を食べるとある。唐代以前の詩には用例がない。

唐詩にもここを含めてわずかに二例、もう一例は、寒山「詩三百三首」其二九〇(『全唐詩』卷八〇六)に、「鹿生深林中、飲水而食草」(鹿は深林中に生き、水を飲みて草を食らう)とある。

〔莫相触〕角をぶつけるな。なぜならと、次句に続く。

〔官家〕政府、お上。唐詩における口語的表現であり、ここではそれによって牧童の口吻を伝えている。詳しくは10「寄衣曲」(卷一)の【語釈】参照。

〔截爾頭上角〕お前の頭の角を切ってしまうよ。「爾」も口語的な表現。

10句は、諸注が指摘するように、『魏書』昭成子孫伝掲載の拓跋暉の故事に基づく。

出為冀州刺史。下州之日、連車載物、發信都、至湯陰間、首尾相繼、道路不斷。其車少脂角、即於道上所逢之牛、生截取角以充其用。暉檢括丁戸、聽其婦首、出調絹五万匹。然聚斂無極、百姓患之。

出でて冀州刺史と為る。州に下るの日、車を連ねて物を載せ、信都を發して、湯陰に至るの間、首尾相繼ぎ、道路断たず。其の車 脂角を少き、道上に逢う所の牛に即きて、生きながら角を截取して以て其の用に充つ。暉 丁戸を檢括し、其の婦首するを聽し、絹五万匹を出だし調す。然れども聚斂極まり無く、百姓之を患う。

すなわち、拓跋暉が地方に赴任する途中、荷物運搬車の脂角(脂を入れる器?)が無かったことに気づき、途中で出くわした牛の角を生きたまま切り取らせ、それに充てたと言う内容である。その後には、暉が税の徴収に厳しい役人であったことが記される。【補】のところでも記すように、拓跋暉のこの故事を踏まえることが、この詩を為政者を非難した諷諭詩とする解釈が出てくることにつながる。

この二句は、互いの角で牛たちが体を傷つけないようにと、牛に直接「爾」と呼びかけて注意を促す牧童の様子を詠じ、詩全体を結んでいる。

### 【補】

【題解】でも述べたように、「牧童」を詩題に含む詩は、張籍以外、儲光義を初めとして全部で四首ある。ここではそのうち、張籍と同じく「牧童詞」と題する儲光義と李涉の詩を挙げて、張籍の詩の特徴について簡単に述べることにする。

儲光義「牧童詞」(『全唐詩』卷一三六)

不言牧田遠 言わず 牧田遠しと  
不道牧陂深 道わず 牧陂深しと  
所念牛馴擾 念う所は 牛の馴擾にして  
不亂牧童心 牧童の心を乱さざるを  
圓笠覆我首 円笠 我が首を覆い  
長簑披我襟 長簑 我が襟を披う  
方將憂暑雨 方將に暑雨を憂い  
亦以懼寒陰 亦以て寒陰を懼る  
大牛隱層阪 大牛 層阪に隠れ  
小牛穿近林 小牛 近林を穿つ  
同類相鼓舞 同類 相鼓舞し  
觸物成謳吟 物に触れて 謳吟を成す  
取樂須臾間 樂しみを須臾の間に取る  
寧問聲與音 寧ぞ声と音とを問わんや

李涉「牧童詞」(同卷四七七)

朝牧牛 朝に牛を牧す  
牧牛下江曲 牛を牧して江曲に下る  
夜牧牛 夜に牛を牧す  
牧牛度村谷 牛を牧して村谷を度る  
荷簑出林春雨細 簑を荷い林を出ずれば 春雨細く  
蘆管臥吹莎草綠 蘆管 臥して吹けば 莎草緑なり  
亂插蓬蒿箭滿腰 乱りに蓬蒿を挿して 箭 腰に滿つ  
不怕猛虎欺黃犢 猛虎の黄犢を欺くを怕れず

どちらの詩にも、直接・間接で「牧童の苦勞」が詠われており、同じ特徴が張籍の詩にも見えることから、このことが「牧童詞」の中心的モチーフであったと考えられる。その他、笛を吹いたり歌を歌ったりするというのも、儲光義、李涉の詩に共通して見られる。

三詩を比較した場合、張籍「牧童詞」は、牛の習性や牧童の行動に対する

細かい描写が際だっており、まずはそこに張籍の特徴があると言えよう。特に末二句の牛への直接の呼びかけは、牛に対する牧童の心遣いがよく現れており、こうした呼びかけは、他の二詩にはない。

張籍の詩には、儲光義の詩と共通する言葉が多く用いられていることから、張籍は「牧童詞」を作るに際し、儲光義の詩を参考にしたことがわかる。儲光義の詩と比較した場合の張籍の詩の独自性は、張籍が、自分の得意とする歌謡としてこの詩を詠じている点にあるだろう。そのことは、「語釈」で指摘したように、口語的な語彙を多く用いていることに顕著であるが、さらに詩の形式でも、三字句を冒頭の句に用いて雑言体にし、さらに5句、9句で換韻する形式をとっていることから言える。これは、儲光義が一句五言の一韻通底で詩を作っているのとはいかにも対照的である。

なお、李涉「牧童詞」が雑言体であり、七言句を基調にしているのは、張籍の詩の作り方を意識したものと考えられる。

最後にこの詩の主題(テーマ)について簡単に記す。

この詩の主題は、最後の二句をどのように解釈するかで変わってくるだろう。李冬生『集注』や馬茂元氏の解説(『唐詩鑑賞辞典』、上海辞書出版社、一九八三年初版)では、この詩が為政者を批判した諷諭詩であると判断する。それに対し増田涉氏(『樂府の歴史的研究』、創文社、一九七一年)は、庶民(この場合牧童)の生活の実態を克明に描写した詩の例としてこの詩を挙げている(三九九・四〇〇頁)。

第10句から、張籍の諷諭精神を読み取ることも可能であろうが、そこには張籍の他の樂府、例えば12「築城詞」や13「猛虎行」(ともに卷一)のような、非難する相手への鋭い批判精神はうかがえない。ここは、なかなか言うことを聞いてくれない牛に対して、故事を踏まえて叱っている、あるいは脅している(と解釈した)。(畑村)

16 沙堤行呈裴相公

【題解】

沙堤のうた、宰相裴度閣下に呈する。沙堤とは、宰相の私邸から皇城に到る通勤路に敷設された、砂の道。もとの地面より高くなっていたので「堤」というのであろう。

沙堤については、平岡武夫氏の「唐の長安城のこと」(『東洋史研究』第一

一卷第四号、一九五二年。のち『白居易—生涯と歳時記』所収。朋友書店、一九九八年)に言及があり、丸山茂氏に「唐代長安城の沙堤」(『沼尻博士退休記念中国学論集』所収。汲古書院、一九九〇年)の専論がある。特に後者は、長安の風土と沙堤の効用・起源と変遷から、工法・管轄・高さ・長さなどの面にまで及ぶ詳細な研究である。

詳細については、丸山氏の研究に譲ることとし、ここでは文学作品に詠じられた沙堤について述べておくことにする。丸山氏も詳述する通り、沙堤を詠じた文学作品で最も早いのは杜甫の詩の例であり、ついで韋諷に「沙堤賦」(『文苑英華』四六)が見え、中晩唐に至って数が増加する。杜甫の例は、「遣興五首」其三(『詳註』巻七)に「沙道尚依然」と見えている。また白居易の「新樂府」五十首其四十一「官牛」(一六五)が、この沙堤を築く困難さを主題としている。

張籍の用例は他に三例、中でも187「謝裴司空寄馬」に「長思歳旦沙堤上、得従鳴珂傍火城」(長く思う 歳旦 沙堤の上、珂を鳴らして火城に傍ふに従うを得るを)という例は、裴度のために敷かれた沙堤を表現したものである。

この詩では「行」の文字を伴い、樂府題となっている。『樂府詩集』には見えないもので、張修蓉氏『中唐樂府詩研究』は「新題新意」に分類している。後には樂府題として定着したらしく、『通志』や明の梅鼎祚の『古樂苑』に見え、宋の文同、元の楊維禎などが同題の樂府を残している。また、同時代では、李賀が「沙路曲」という新題の樂府を作っている。

裴相公は、裴度のこと。「相公」は宰相をいう。唐代には相公の官名はなく、宰相は同門下中書平章事の官を受けられたが、詩題や詩中においては、しばしば「相公」と呼ばれる。

裴度、字は中立、河東聞喜の人。吳元済の反乱を平定、四朝にわたって国政の中枢におり、国外までその名をとどろかせたという名宰相である。また、文壇の領袖としても著名であり、張籍・韓愈・白居易・劉禹錫・李紳といった中唐の名だたる詩人たちと交際し、あるいは彼らの庇護者となった。

裴度の生卒年については、従来、永泰元年(765)〜開成四年(839)の享年七十五歳の説が行われてきたが、羅聯添氏「劉夢得年譜」(『唐代詩文六家年譜』所収。学海出版社、一九八六年)が広徳二年(764)〜開成四年(839)の享年七十六歳とした。植木久行氏「唐代作家新疑年録(7)」(『文経論叢』第二九卷三号、人文学科篇一四、一九九四)も羅氏に基づいて詳しく考証している。この新説と羅氏の張籍年譜によれば、裴度は張籍より二歳年長ということになる。

李冬生注の指摘するように、裴度は、暗殺された武元衡の後継者として元

和十年六月に宰相の位につき、その後しばしば中央での宰相就任と地方勤務とを繰り返した。歴史書の記載によって、元和十年宰相就任以降のおおよその経歴を記せば、次のようになる。

元和一〇年(785)	六月、武元衡の後任として宰相就任。
元和一二年( )	吳元済の反乱を平定。
元和一四年(819)	九月、河東節度使となる。
長慶二年(822)	三月、再び宰相となる。
長慶三年( )	六月、罷めて尚書左僕射となる。
宝曆二年( )	八月、山南西道節度使となる。
大和四年(830)	二月、宰相となる。
830826823	九月、山南東道節度使となる。(張籍、この年卒?)

この「沙堤行」がいつ作られたかについては諸説があり、【補】で取り上げることにしたい。

#### 【本文・書き下し文】

- |            |                  |
|------------|------------------|
| 1 長安大道沙爲堤  | 長安の大道 沙を堤と為し     |
| 2 風吹無塵雨無泥  | 風吹きて塵無く 雨に泥無し    |
| 3 宮中玉漏下三刻  | 宮中の玉漏 三刻に下り      |
| 4 朱衣導騎丞相來  | 朱衣の導騎 丞相來たる      |
| 5 路傍高樓息歌吹  | 路傍の高樓 歌吹を息め      |
| 6 千車不行行者避  | 千車は行かず 行者は避く     |
| 7 街官閭吏相傳呼  | 街官閭吏 相ひ伝呼し       |
| 8 當前十里惟空衢  | 当前十里 惟だ空衢        |
| 9 白麻詔下移相印  | 白麻の詔下りて 相印を移し    |
| 10 新堤未成舊堤盡 | 新堤 未だ成らざるに 旧堤 尽く |

#### 【口語訳】

- 1 長安の広い道 砂で堤を作る
- 2 風が吹いても塵は上がらず 雨が降ってもぬかるまない
- 3 宮中の水時計が 日の出前三刻になると
- 4 朱衣の先払いが現れ 丞相殿がやってくる
- 5 道ばたの高樓では 歌曲がやみ

6 いつものたくさんの車は通らず 通行人は避ける  
 7 町や坊門の役人が 宰相殿のお出ましを伝えると  
 8 目の前十里は 大通りが空になる  
 9 白麻の詔が下って 宰相の印が他人に渡れば  
 10 新しい堤ができあがらぬうちに 古い堤はなくなってしまふ

## 【押韻】

堤・泥―上平―二齊 來―上平―一六哈（同撰）  
 吹・避―去声五寘 衢―上平―一〇虞（同用）  
 呼―上平―一模 盡―上声―一六軫（上去通押）  
 印―去声―二震

## 【語釈】

1・2 長安大道沙為堤、風吹無塵雨無泥

〔長安大道〕「長安」「大道」ともに常見の語。それぞれ古い例をいくつか挙げれば、「長安」は、班固の「詩」（『太平御覽』八一五）に「長安何紛紛、詔葬霍將軍」（長安 何ぞ紛紛たる、詔して霍將軍を葬らしむ）といい、王粲の「七哀詩二首」其一（『文選』卷二三）に「南登霸陵岸、迴首望長安」（南のかた 霸陵の岸に登り、迴首して 長安を望む）という。「大道」は、「古詩為焦仲妻作」（『玉台新詠』卷一）に「隱隱何甸甸、俱會大道口」（隱隱として 何ぞ甸甸たる、俱に大道の口に會う）という。

唐に入ってから膨大な用例があるが、唐代では「長安大道」の形の例もいくつか見えるようになる。盧照隣の「長安古意」（『全唐詩』卷四一）に「長安大道連狹斜、青牛白馬七香車」（長安の大道 狹斜に連なる、青牛 白馬 七香車）といい、李白の「峨眉山月歌、送蜀僧晏入中京」（王本卷八）に「長安大道橫九天、峨眉山月照秦川」（長安の大道 九天に横たわり、峨眉 山月 秦川を照らす）というなどの例がある。

ちなみに「長安道」は「洛陽道」とともに樂府題となっており、『樂府詩集』卷二三の横吹曲辭の条には、梁の簡文帝以下、六朝から唐にかけての二十首を越える作が収められている。また、「大道曲」の樂府題もあり、『樂府詩集』卷七五には、謝尚の作を一首収めている。

張籍の敬愛した杜甫には「長安大道」の例はなく、「長安」が二十二例、その中には「飲中八仙歌」（『詳註』卷二）の「長安市上眠酒家」（長安市上 酒家に眠る）、「月夜」（同卷四）の「未だ長安を憶うを解せざるを」など

の有名な例を含む。「大道」は一例のみで、「李鄴県丈人胡馬行」（同卷六）に「洛陽大道時再清、累日喜得俱東行」（洛陽の大道 時に再び清く、累日 俱に東行するを得るを喜ぶ）と「洛陽大道」の形で見える。

張籍の「長安大道」の例はこれのみ。「長安」の例は他に詩題に一例、詩中に十二例がある（ただし、387「楊柳枝詞」二首其二（卷六）の一例は劉禹錫の作と思われる）。そのうち、440「洛陽行」（卷七）の例は、「百官日月拜章表、馭使相統長安道」（百官日月 章表を拜し、馭使相が続く 長安の道）と、「道」の文字とともに用いている。張籍の「大道」の例はこの句のみ。

〔沙為堤〕砂で堤を作る。沙堤を作るには澆水の砂が運ばれてきたこと、丸山氏前掲論文に詳しい。

〔風吹無塵〕風が吹いても塵が立たない。黄土高原に属する長安は、風が吹くとひどい土ぼこりが舞い、それが沙堤の必要性の一つであったこと、丸山氏前掲論文に詳細な記述がある。

「風吹」の表現も頻見される。阮籍「詠懷詩十七首」其一（『文選』卷二三）の「清風吹我衿」（清風 我が衿を吹く）のように「〇風吹く」の形でも頻繁に用いられる。風に修飾語を冠しない例も、古く「怨歌行古辭」（『樂府詩集』卷四一）に「百年未幾時、奄若風吹燭」（百年 未だ幾時ならず、奄として風の燭を吹くが若し）と見え、曹植の「薤露行」（『藝文類聚』卷四一）では、「人居一世間、忽若風吹塵」（人の一世の間に居るは、忽として風の塵を吹くが若し）と、「塵」の字を伴って用いられている。

唐詩においても多くの用例があり、先に「長安大道」の例として引いた李白の「峨眉山月歌、送蜀僧晏入中京」の直前の部分にも、「峨眉山月還送君、風吹西到長安陌」（峨眉山月 還た君を送る、風吹きて西のかた到る 長安の陌）という。杜甫には「〇風吹く」の形を含めて二十八例、「雨（峽雲行清曉）」（『詳註』卷一五）に「風吹蒼江樹、雨灑石壁來」（風は吹く 蒼江の樹、雨は石壁に灑ぎ来る）という例は、この詩と同じく雨と風をともに用いている。

張籍には、他に五例（ただし一例は先に述べた劉禹錫の「楊柳枝詞」）、282「岸花」の「東風吹渡水、衝着木蘭橈」（東風 吹きて水を渡り、衝着す 木蘭の橈）のように、全て「〇風吹く」の形の例である。

「無塵」の表現は、陸雲の「大將軍譙会被命作詩」（『文選』卷二〇）に「函夏無塵、海外有謐」（函夏 塵無く、海外 謐かなる有り）という例があり、これは天下太平の比喩として用いられている。陶淵明の「歸園田居六首」其一（四部叢刊本卷二）では「雜」の字を伴って「戸庭無塵雜、虛室有餘閑」



(戸庭 塵雜無く、虚室 餘間有り)と用いられているが、これは実際の塵やガラクタと俗世の雑事とをかけた表現であろう。

唐詩においても頻見する表現で、張説の「清夜酌」(『全唐詩』巻八九)では、「秋陰士多感、雨息夜無塵」(秋陰 士には感多く、雨息みて 夜に塵無し)と、雨上がりに塵がおさまったことを詠じている。杜甫には「無塵」の用例はないようだ

張籍の「無塵」の例は他に二例、43「江南春」(巻二)に「江南楊柳春、日暖地無塵」(江南 楊柳の春、日 暖かにして 地に塵無し)といい、194「題韋郎中新亭」(巻四)に「起得幽亭景最新、碧沙地上更無塵」(幽亭を起こし得て 景 最も新たななり、碧沙の地上 更に塵無し)という。

「雨無泥」雨が降っても道がぬかるむことがない。沙堤のもう一つの実用面として、雨の時の泥濘を防ぐことがあったことについても、丸山前掲論文に、この詩も引きながら詳細に述べられている。白居易の「官牛」(前出)にも「昨来新拜右丞相、恐畏泥塗汚馬蹄」(昨来 新たに拜す 右丞相、恐畏る泥塗の馬蹄を汚すを)の句がある。

「無泥」の表現は、比喩的な意味の深みを持つ「無塵」ほど多くは用いられない。唐以前では、隋の盧思道の「贈劉儀同西聘」(『文苑英華』巻二四八)に「灞陵行可望、函谷久無泥」(灞陵 行くゆく望むべく、函谷 久しく泥無し)という例が見えるのみのようである。

唐詩においても、初唐には用例がなく、杜甫の「中丞嚴公雨中垂寄見憶一絶、奉答二絶」其二(『詳註』巻一一)に「何日雨晴雲出溪、白沙青石洗無泥」(何れの日か 雨晴れて 雲溪を出で、白沙青石 洗われて泥無からん)というなどの例が散見されるのみのようである。杜甫には他に「無泥滓」の例が二例見えるのみ。

張籍より一世代上の顧況の「贈僧二首」其一(『全唐詩』巻二六七)に「家住義興東舍溪、溪辺莎草雨無泥」(家は住む 義興の東舍溪、溪辺の莎草 雨に泥無し)といい、顧況と同時期の陳羽の「冬晚送友人使西蕃」(『全唐詩』巻三四八)に「玉關晴有雪、砂磧雨無泥」(玉關 晴れて雪有り、砂磧 雨に泥無し)という例は、ともに「雨無泥」の形で用いられている。

張籍の「無泥」の用例はこれのみ。

この句、諸本間の異同が大きい。静嘉堂本は「早風無塵晚無泥」に作っている。これであれば、風と雨という気象の対ではなく、朝と晩という時間の対となる。朝の風に塵がたたず、晩に泥とならない」というのは、朝から晩まで、すなわちいつも変わらず、塵も立たずぬかるみもしない快適さを

表現したということになるか。

『唐文粹』は「早風無塵暖無泥」に作っている。こちらであれば、朝の寒さと昼の暖かさという、触觉による対ということになる。暖かくして泥無し」というのは、雪や氷が暖かさに溶けることをいうと解せようか。

『唐詩百家全集』は「早風無塵雨無泥」といい、雨と風の対ではあるが、風を朝の風としている。『全唐詩』は同じく「早風無塵雨無泥」としており、「雨」の字に注して「一に晩に作り、一に暖に作る」といつている。この本文に従う注釈書が多く、李冬生注では「早風」に「早晨の風」と注した上で、古代の宰相の登朝が明け方であったことを指摘している。

「早風」は朝の風。六朝以前の詩には、梁の王筠の「和衛尉新渝侯巡城口号」(『文苑英華』巻二四〇)に「銅鳥迎早風、金掌承朝露」(銅鳥 早風を迎え、金掌 朝露を承く)という例が見えるのみのようである。

唐詩にも例は少なく、五例しか残っていないようだ。張籍以前では、初唐の袁朗の「和洗掾登城南阪望京邑」(『全唐詩』巻三〇)に「鳴珮含早風、華蟬曜朝日」(鳴珮 早風を含み、華蟬 朝日に曜く)という例が見え、大曆期の皎然の「秋日送狄高上人往江西謁曹王」(『全唐詩』巻八一)に「齋容秋水照、香鬢早風輕」(齋容 秋水に照り、香鬢 早風に軽し)という例が見えるのみ。張籍の例も他には見えない。

詩語としては用いられていないものの、特別なことばだったという訳ではなさそう。初唐の李善が「与蘇武三首」其一(『文選』巻二九)の「欲因晨風發、送子以賤軀」(晨風の発するに因り、子に送るに賤軀を以てせんと欲す)に注して、「晨風、早風」と言い換えている。

### 3・4 宮中玉漏下三刻、朱衣導騎丞相來

「宮中」このことばは、古く『周礼』天官「宮正」に「以時比宮中之官府」(時を以て宮中の官府を比ぶ)と見えるが、六朝期には「宮中」の形を含めても、詩語としてはあまり用いられなかったようだ。童謡などに数例見えるほかは、徐陵の「雜曲」(『文苑英華』巻二一一)に「宮中本造鴛鴦殿、為誰新起鳳凰樓」(宮中 本と鴛鴦殿を造りしに、誰が為にか新たに鳳凰樓を起こす)と見えるのみである。

唐に入ると、数多くの詩に用いられるようになる。蘇頌の「奉和春日幸望春宮应制」(『全唐詩』巻七三)に「宮中下見南山尽、城上平臨北斗懸」(宮中下に見る 南山の尽くるを、城上平かに臨む 北斗の懸かるに)と見えるのは、『唐詩選』にも収められる例。杜甫に五例見えるうち、「宮中每出帰東省、会送夔龍集鳳池」(宮中 出でて東省に帰る毎に、会送す 夔龍の鳳池

に集うを)の句で結ぶ「紫宸殿退朝口号」(『詳註』巻六)も、『唐詩選』に収められている。杜甫の「宮中」の例は他に五例。

張籍には、「宮中」の例を含めて他に五例。37「楚宮行」(巻一)に楚の宮殿である「章華宮」を詠じ、336「同嚴給事聞唐昌觀玉蕊近有仙過作二首」其一(巻六)に西王母の宮殿を描写するのに用いるほかは、25「吳宮怨」(巻一)・29「白頭吟」(巻一)・376「離宮怨」の三例ともに、宮怨詩の中で用いられている。

「玉漏」漏刻、すなわち水時計の美称。漏刻はすでに『周礼』に見える、古くから用いられたものであるが、「玉漏」の語は、六朝期には用例が見られず、唐に至って詩の中にしばしば用いられるようになる。

陳注・李冬生注ともに引く蘇味道の「正月十五夜」(『全唐詩』巻六五)に、「金吾不禁夜、玉漏莫相催」(金吾 夜を禁ぜず、玉漏 相ひ催す莫し)の句がある。夜の描写として「玉漏稀」といった形で用いるものが多い中、王维の「春日直門下省早朝」(趙注本巻一)に「玉漏隨銅史、天書揮夕郎」(玉漏 銅史に随ひ、天書 夕郎を揮す)という例は、この詩と同じく明け方の描写か。杜甫には用例がない。

張籍の用例はこれのみ。

「下三刻」「刻」については、李冬生注に詳しいので、それを借りることとする。「昔は漏箭で時を計り、一昼夜を共に百刻に分け、春分と秋分には昼夜がそれぞれ五十刻、冬至には昼が四十刻で、夜が六十刻となる。夏至はその反対である。三刻は一刻の三倍で、約四十五分である。『大唐六典』巻一〇、太史局の掣壺正の条によって補えば、秋分以後は九日ごとに一刻を減らし、春分以後は九日ごとに一刻を加えるという。

以下、李冬生注は陸倕の「新刻漏銘」とその李善注を引く。「新刻漏銘」(『文選』巻五六)の序の部分の冒頭に「夫自天觀象、昏旦之刻未分」(夫れ天に自つて象を觀るに、昏旦の刻 未だ分かつたず)という。その李善注に引く『五經要義』に「昏、暗也。旦、明也。日入後漏三刻為昏、日出前三刻為明」(昏は、暗なり。旦は、明なり。日入りて後の漏三刻を昏と為し、日出づる前の漏三刻を明と為す)とある。

陳注は、『新唐書』韋渠牟伝に「大抵延英對、雖大臣率漏下二三刻止。渠牟奏事、輒五六刻乃罷、天子歛甚」(大抵 延英に對するに、大臣と雖も率ね漏の下ること二三刻にして止む。渠牟 事を奏するや、輒ち五六刻にして乃ち罷め、天子 歛ぶこと甚だし)というのを引いている。普通なら、高官であっても二三刻(約三十〜四十五分)で対面が終わるのに、寵臣である韋

渠牟の場合は、五六刻(約七十五〜九十分)にも及んだというのである。

歴史書においては、『漢書』五行志下之下に「成帝建始元年八月戊午、晨漏未盡三刻、有兩月重見」(成帝の建始元年八月戊午、晨漏 未だ盡きざること三刻、兩月の重見する有り)という例もある。なお、『春秋』哀公十一年「左伝」に「請三刻而踰之」(請う、三刻して之を踰えん)というのは、三たび固く約束するという意味で用いられている。

詩における「三刻」の用例は、張籍以前には見えず、同時代の劉禹錫の「代靖安佳人怨」(『箋註』巻三〇)の序文に、宰相武元衡の暗殺事件を表現する中で「元和十一年六月、公將朝。夜漏未盡三刻、騎出里門、遇盜、斃于牆下」(元和十一年六月、公 將に朝せんとす。夜漏 未だ盡きざること三刻、騎して里門を出で、盜に遇い、牆下に斃ず)という例がある。詩中では、後の李洞の「贈長安畢郎中」(『全唐詩』七二三)に「從此幾遷為計相、蓬萊三刻奏東巡」(此れより幾たびか遷りて計相と為り、蓬萊三刻 東巡を奏せん)という例があるのみである。

『新唐書』韋渠牟伝の例では、「下」の文字は、水時計の水が滴る意味で用いられており、この例と同じように考えれば、「沙堤行」の「下三刻」も三刻の間という時間の長さを指すことになろう。劉禹錫の例でも、夜漏の尽きる約四十五分前という意味で、「三刻」は時間の長さを現すのに用いられている。李洞の例は意味が解しがたい。

この詩の場合、「下」を水が滴ると解釈して、三刻の時間と考えると、四十五分ほどかかって登朝することを表現していると解釈できようか。

また、細かい違いであるが、下とのつながりを考えれば、「下三刻」は時刻を指すと解することもできるように思われる。水時計であるから、水が「下」というのは、水が滴ってその時刻になるということになろう。そう考えると、「下三刻」で、日の出の三刻前あるいは夜漏の終わる三刻前になった官吏の登朝時刻になったということを表示していると解釈できるのではないだろうか。

唐では、日の出前二刻半の時間を暁とし、日の入り後二刻半の時間を昏とし、昏から暁までの間を夜とする。夜を五更に分け、さらに更を五点に分かつ。そして、宮門は五更五点到開かれ、官吏たちが一斉に参内することになっていた。日の出前三刻であれば、暁の始まる半刻前ということになり、五更五点的開門時刻とほぼ重なる。また、夜漏の終わる(暁の始まる)三刻前であれば、劉禹錫の記す武元衡の場合がそうであったように、開門時間間に合うような家を出る頃合いである。百官たちは、開門の三〜四十分前の五更三点に集まって待機することになっていた。「五更五点」や「五更三点」と表現するのはくだくだしくなるから、「下三刻」と簡潔に表現したとも考

えられよう。

本稿では、一応後者のように解して口語訳を作成したが、いずれにせよ、宰相の朝の出勤を描写していることは間違いないであろう。

なお、唐の時代の時間に関する事柄や、武元衡暗殺の夜の一更・一点の長さなどについては、平岡武夫氏『白居易』(筑摩書房、中国詩文選十七、一九七七年)の二八〇〜二八三頁に、劉禹錫の詩も用いながら、詳細に解説されている。また、五更三点の参集については、吉川幸次郎博士『杜甫詩注』第五冊(筑摩書房、一九八三年)五二〜五三頁に詳しい。

〔朱衣〕「朱衣吏」のこと。朱の衣を着た先導の吏。李冬生注にも引く『新唐書』賈餗伝に「穆宗崩、告哀江浙、道拜常州刺史。旧制、兩省官出使、得朱衣吏前導。餗赴州、猶用之、觀察使李德裕救吏還、怏怏為憾」(穆宗崩じ、哀を江浙に告げ、道に常州刺史に拜せらる。旧制、兩省の官出使すれば、朱衣の吏の前導するを得。餗 州に赴きて、猶お之を用い、觀察使李德裕 吏に救して還らしめ、怏怏として憾みと爲す)という。

李冬生注は、さらに鄭谷の「献制詰楊舍人」(『全唐詩』卷六七六)に、「隨行已有朱衣吏、伴直多招紫閣僧」(行に隨うには已に朱衣の吏有り、直に伴うには多く紫閣の僧を招く)という句を引いている。

唐詩における「朱衣」の例は盛唐からあるが、四品五品の官僚の衣が朱であったため、そちらの意味で用いられているのがほとんどで、先導の吏の衣服の例としては、張籍のこの例と鄭谷の例のみのようだ。

張籍の「朱衣」の例は他に一例、211「新除水曹郎答白舍人見賀」(卷四)に「黄紙開呈相府後、朱衣引入謝班中」(黄紙 開き呈す 相府の後、朱衣 引きて入る 謝班の中)という。

〔導騎〕先導の騎馬の者。『後漢書』独行伝の范式の伝に「(范)式行部到新野、而果選(孔)嵩為導騎、迎式」(式 行部して新野に到るに、果 嵩を選びて導騎と爲し、式を迎えしむ)といい、注に「導引之騎」とある。

六朝以前と初盛唐詩には用例がなく、中唐以降にいくつかの用例が見える。韋応物の「登蒲塘駅、沿路見泉谷村墅、忽想京師舊居、追懷昔年」(『全唐詩』卷一九一)に「青山導騎遶、春風行旆舒」(青山 導騎遶り、春風 行旆舒ぶ)というのが、張籍に先立つ例。

韓愈と李正封の「晚秋鄆城夜会聯句」(『繫年集釈』卷一〇)の韓愈の担当部分に「賓筵尽狐趙、導騎多衛霍」(賓筵 尽く狐趙、導騎 衛霍多し)というのは、裴度に関して用いられた例。吳元濟の乱を平定、凱旋した裴度の賓客を重耳の従者として見える狐偃と趙衰に、先導の騎馬の士を漢の名将で

ある衛青と霍去病に、それぞれ喩えた表現である。張籍の「導騎」の用例はこれのみ。

〔丞相来〕丞相殿がお出ましになる。「丞相」は官名。君主を補佐する大臣。唐代には丞相の位は廃止されていたが、宰相を指してしばしば詩中に用いられる。

六朝の詩においては、陶淵明の「命子」(四部叢刊本卷???)に「臺臺丞相、允迪前蹤」(臺臺たる丞相、允に前蹤を迪む)というなどの用例がある。漢の時に丞相となつた祖の陶青を表現したものである。

唐詩では、杜甫の有名な「蜀相」(『詳註』卷九)が「丞相祠堂何処尋、錦官城外柏森森」(丞相の祠堂 何れの処にか尋ねん、錦官城外 柏森森)と歌い起こされるなど、多数の例がある。これは実際に丞相の位についた諸葛亮を詠じたもの。杜甫の丞相の用例は他に七例。李頎の「寄綦母三」(『全唐詩』卷一三四)に「顧眄一過丞相府、風流三接令公香」(顧眄 一たび過ぐ 丞相の府、風流 三たび接す 令公の香)というのは、唐代の宰相について用いた例。『唐詩選』にも収められる。

張籍の「丞相」の例は、他に三例。177「新城甲仗樓」が故事を用いた表現であるのを除き、139「和裴司空以詩請刑部白侍郎双鶴」(卷二)に「丞相西園好、池塘夜水通」(丞相 西園好し、池塘 夜水通ず)といい、222「和裴司空酬滿城楊少尹」に「誰不望歸丞相府、江辺楊柳又秋風」(誰か望まざらん 丞相の府に帰るを、江辺の楊柳 又た秋風)というのも、ともに裴度について用いた例である。

なお、「来」の文字を四庫全書本は「至」に作る。

5・6 路傍高楼息歌吹、千車不行人者避

〔路傍高楼〕(沙堤を敷いた)道のそばのたかどの。下に「歌吹」といっており、あるいは妓楼を指すか。

「路傍」は「鷄鳴」古辞(『樂府詩集』卷二八)に「五日一時来、觀者滿路傍」(五日 一時に來たり、觀る者 路傍に滿つ)といい、劉楨の「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「輦車飛素蓋、從者盈路傍」(輦車 素蓋を飛ばし、從者 路傍に盈つ)というなど、古くから詩の中に多く用いられる。

唐代でも、崔国輔の「長樂少年行」(『全唐詩』卷一九)に「章臺折楊柳、春日路傍情」(章臺 楊柳を折る、春日 路傍の情)というなど、多数の用例があり、杜甫には、「新婚別」(『詳註』卷七)に「嫁女与征夫、不如棄路傍」(女を嫁して征夫に与うるは、路傍に棄つるに如かず)というなど、全

五例の用例がある。

張籍には他に二例、<sup>254</sup>「贈王侍御」(巻四)に「自歎獨為折腰吏、可憐驄馬路傍行」(自ら歎ず 独り折腰の吏と為るを、憐れむべし 驄馬 路傍に行く)といい、<sup>422</sup>「樵客吟」(巻七)に「共知路傍多虎穴、未出深林不敢歇」(共に知る 路傍に虎穴多きを、未だ深林を出でずんば 敢えて歇まず)という。

「高楼」も「古詩十九首」其五(『文選』巻二九)に「西北有高楼、上与浮雲齊」(西北に高楼有り、上は浮雲と齊し)といい、曹植の「七哀詩」(『文選』巻二三)に「明月照高楼、流光正徘徊」(明月 高楼を照らし、流光正に徘徊す)というなど、古くから多くの用例がある。

唐代にも多数の用例がある。杜甫に十例あるうち、「遣興五首」其一(『詳註』巻七)の詩に「北里富薰天、高楼夜吹笛」(北里 富は天を薰じ、高楼 夜 笛を吹く)という例は、秦州における作のようだが、この張籍の詩と同じく、富貴の家の高楼のにぎわいを音楽によって表現している。楊巨源の「長安春遊」(『全唐詩』巻三三三)に「日暖雲山当広陌、天清糸管在高楼」(日暖かくして 雲山 広陌に当たり、天清くして 糸管 高楼に在り)という例は、繁華な長安の高楼を音楽と友に描写している。

張籍には他に三例、「最高楼」の形で用いられた<sup>193</sup>「書懷寄王秘書」の例を除けば、残る二例は、<sup>20</sup>「節婦吟」(巻一)に「妾家高楼連苑起、良人執戟明光裏」(妾が家の高楼は 苑に連なつて起ち、良人 戟を執る 明光の裏)というのも、「宮中」の語釈で触れた<sup>29</sup>「白頭吟」(巻一)に「宮中為我起高楼、更開花池種芳樹」(宮中 我が為に 高楼を起こし、更に花池を開きて 芳樹を種う)というのも、ともに樂府の中で富貴と寵愛の象徴として「高楼」が用いられている。

「息歌吹」「吹」の文字、平声の時は動詞で吹くの意、去声の時は名詞で吹奏楽器、またその音の意。『漢語大詞典』では、平声の「歌吹」を歌唱し吹奏することとし、去声の「歌吹」を歌声と楽器の音としている。陳注の引く、鮑照の「蕪城賦」(『文選』巻一一)に「塵閉撲地、歌吹沸天」(塵閉 地を撲くし、歌吹 天に沸く)という句を、『漢語大詞典』では後者の例として引いている。ただ、判然としない場合も多いようである。

なお、詩の押韻字の場合、意味とは必ずしも一致していない場合も多いようだが、この詩においては去声の「避」の文字と押韻しており、これによれば名詞ということになる。

「歌吹」は、六朝詩においては、「採桑度」七曲其一(『樂府詩集』巻四八)に「女兒採春桑、歌吹当春曲」(女兒 春桑を採り、歌吹 当に春曲なるべ

し)といい、謝朓の「詠風」(校注巻五)に「高響飄歌吹、相思子未知」(高響 歌吹を飄し、相思うも 子は未だ知らず)というなどの用例がある。

後者は名詞としてよいであろうが、前者は名詞とも動詞とも解せようである。唐詩においても多く用いられ、「玉漏」の語釈に引いた王維の「春日直門下省早朝」にも「旌旗映闔闔、歌吹滿昭陽」(旌旗 闔闔に映じ、歌吹 昭陽に滿つ)の句がある。杜甫には一例のみ、「滕王亭子二首」其二(『詳註』巻一三)に「尚思歌吹入、千騎擁霓旌」(尚お思ふ 歌吹の入り、千騎 霓旌を擁するを)という。

張籍の用例は他に二例、そのうち、<sup>138</sup>「和戸部令狐尚書裴司空見招看雪」(巻二)に「高韻更相応、寧同歌吹歎」(高韻 更に相い応ず、寧ろ歌吹の歎びを同じうせん)という例は、裴度に関して用いられた例。

「千車不行」たくさん車の車は通るのをやめる。宰相が通る時には、他の車の通行が禁止されていたことをいう。「千」を付けるのは、いつもはたくさん車が通っているという意味が込められているか。

「千車」という言い方は、古く「春秋」哀公二年の「左伝」に「齊粟千車」というなど、歴史書などで積み荷の量を表現するには用いられているが、車の台数をいう表現には用いられなかったようで、「車千乘」というような表現をしていたようである。

詩においては、「千車」という表現は、どちらの用法も以前の詩には見当たらない。張籍の時代になって、白居易の「過天門街」(六四九)に「千車万馬九衢上、回首看山無一人」(千車万馬 九衢の上、回首して山を看るも 一人も無し)という例が見えるのなどが、最も早い例のようである。張籍の「千車」の用例はこれのみ。

「行者避」道行く人々は避ける。歩行者の通行も禁止されていた。

「行者」は、古く『周礼』『礼記』等に見え、詩においても「陌上桑」古辞(『樂府詩集』巻二八)に「行者見羅敷、下担捋髭鬚」(行く者 羅敷を見れば、担を下して 髭鬚を捋る)と見える(「観者」に作るテキストもある)。陶淵明の「癸卯歲始春、懷古田舎二首」其二(四部叢刊本巻三)にも「耕種有時息、行者無問津」(耕種 時有りて息うも、行く者 津を問う無し)という。ただ、素朴な語彙のためか、宋齊以降にはほとんど例がない。

唐詩においても例はあまり多くないようで、張籍以前には、高適の「東平路作三首」其三(『全唐詩』巻二二二)に「秋至復搖落、空令行者愁」(秋至れば 復た搖落し、空しく行く者をして愁えしむ)というなどの数例があるのみ。杜甫には例がなく、張籍の例もこれのみ。

丸山氏前掲論文には、武元衡の暗殺時に同時に襲われた裴度が、永楽坊の私邸から出勤の途中、通化坊(もと安興坊)で難に遭ったことから、裴度の登朝経路は朱雀門街東第四街を通るものであり、その道が、北里を擁して繁華を極めた平康坊と東市の間を抜け、『長安志』に「尽夜喧呼、灯火不絶、京中諸坊莫之与比」といわれた崇仁坊の東を走る、当時のメインストリートであったと指摘されている。

7・8 街官閭吏相伝呼、当前十里惟空衢

〔街官〕街路を巡邏する役人のことであろう。以前の用例は見当たらず、唐詩においても、この張籍の一例のみのものである。

静嘉堂本は「門官」に作る。「門官」であれば城門守備の役人で、古く『春秋』僖公二十二年の『左伝』に「門官殲焉(門官殲く)と見え、杜預の注に「門官、守門者。師行則在君左右(門官は、門を守る者なり。師行すれば則ち君の左右に在り)」と説明されている。有名な「宋襄の仁」の逸話の一節である。ただ、詩における用例は、漢魏六朝の詩にも唐詩にも見えないようだ。

〔閭吏〕「閭」はもと村里の門の意。長安の坊里の門を取り締まる小役人のことであろう。これも以前の用例は見当たらず、唐詩においてもこの例のみのものである。

〔伝呼〕「伝呼」は叫んで伝えること。街路の役人や坊門の役人たちが、次々に宰相殿のおなりを伝え叫び、人払いをするのであろう。

『漢書』蕭望之伝に「仲翁出入従倉頭廬兒、下車趨門、伝呼甚寵(仲翁出入に倉頭廬兒を従え、車を下りて門に趨き、伝呼して甚だ寵あり)といひ、顔師古の注に「下車而嚮門、伝声而呼侍従者、甚有尊寵也(車を下りて門に嚮き、声を伝えて侍従者を呼び、甚だ尊寵有るなり)という。役所の下働きたちが、王仲翁の到着を回し伝えることをいう。

陸倕の「新刻漏銘」(『文選』巻五六)に「衛宏載伝呼之節、較而未詳(衛宏 伝呼の節を載するも、較かにせんとして未だ詳かならず)というのは、漏刻の時間を伝え知らせること。

陳注は、北周の王褒の「太保吳武公尉遲綱碑銘」(『藝文類聚』巻四六)に「甲第當衢、伝呼啓路(甲第は衢に当たり、伝呼して路を啓く)というのを引く。この詩と同じく、高官のために呼び回って道をあけることをいう例

のようである。

詩においては、古く「婦病行」古辞(『樂府詩集』巻三八)に「婦病連年累歳、伝呼丈人前一言(婦病みてより 連年累歳、丈人を伝呼して 一言を前む)という例がある。これは大声で呼ばわるわけではなく、人づてに呼んでもらう意であろう。庾信の「勤贈司寇淮南公」(集注巻三)にも「伝呼擁絳節、交戟映彤闈(伝呼 絳節を擁し、交戟 彤闈に映ず)の句がある。蕭望之伝を踏まえて、伝呼する役人たちが使者の赤い節を持つて、高い、高位にあることを表現した句のようである。

唐詩においては初唐から例がある。張説の「奉和聖製過晋陽宮应制」(『全唐詩』巻八六)に「伝呼大駕来、文物如雲従(伝呼す 大駕の来れるを、文物 雲の如く従う)というのは、天子(玄宗)のお出ましを触れ回る例。

杜甫に二例、「晚出左掖」(『詳註』巻六)に「昼刻伝呼浅、春旗簇仗齐(昼刻 伝呼浅く、春旗 簇仗斉し)というのは、「新刻漏銘」の例に基づき、時間を伝え知らせること。「返照」(同巻二〇)に「牛羊識僮僕、既夕伝呼(牛羊 僮僕を識り、既に夕べにして 伝呼に伝呼)というのは、牛や羊が牛飼いの伝え呼ぶ声に答えて鳴くという例で、従来になかった新鮮な用い方といえよう。

張籍のこの例はオーソドックスな例といえよう。他の詩には見えない。

〔当前十里〕眼前の十里。丸山氏は前掲論文において、裴度の私邸から建福門までの距離を約七・五キロと算定し、張籍のこの句をも挙げて、「十里(5.29km)が急に真実味を帯びてくる」と述べられている。なお、『全唐詩』の校語によれば「一里」に作るテキストもあるようだが、丸山氏の算定された数字からすると、十里の方がよいであろう。

「当前」は、古く『史記』の李斯列伝に「快意当前、適觀而已矣(意を当前に快くし、観に適うのみ)という用例がある。『文選』巻三九にも「上書奏始皇」として収める上奏文の一節である。

六朝以前の詩においては用例がわずかで、『晋書』劉曜載記に記す「隴上歌」に「丈八蛇矛左右盤、十盪十決無当前(丈八の蛇矛 左右に盤り、十盪十決して 前に当たる無し)という例が見えるのみ。

唐詩においても例はごくわずかで、「当前前むべし」の例(韋忠物の「留別京洛親友」の例など)や「前〇に当たる」の例(元稹の「代曲江老人百韻」など)を除けば、この詩の他に二例のみとなる。劉禹錫の「武陵觀火詩」(『箋証』巻二三)に「当前迎焮絶、是物同膏腴(当前 焮絶を迎え、是る物同じく膏腴)といい、姚合の「題鳳翔西郭新亭」(『全唐詩』巻四九九)に「兩面寒波漲、当前軟柳垂(兩面 寒波漲り、当前 軟柳垂る)という例のみ

である。

「十里」も当たり前のことばであるが、詩における用例はあまりなく、漢魏六朝においては齊の釈宝月の「估客樂」(『樂府詩集』卷四八)に「郎作十里行、儂作九里送」(郎は作す 十里の行、儂は作す 九里の送)と用いているのが最も古いようで、後に数例が散見されるのみである。

唐に至ると極めて多くの用例が見られるようになる。宋之問の「過蠶洞」(『全唐詩』卷五二)に「越嶺千重合、蠶谿十里斜」(越嶺 千重合し、蠶谿 十里斜めなり)といい、高適の「別董大二首」其一(『全唐詩』卷二一四)に「十里黄雲白日曛、北風吹雁雪紛紛」(十里の黄雲 白日曛じ、北風雁を吹きて 雪紛紛たり)というなど、枚挙にいとまがない。

杜甫には「四十里」の例を除けば詩中に三例、そのうち「往在」(『詳註』卷一六)に「解瓦飛十里、總帷紛曾空」(解瓦 飛ぶこと十里、總帷 曾空に紛たり)というのは、安祿山の乱による長安の荒廃ぶりの描写に用いている。

張籍には他に一例、245「送稽亭山寺僧」(卷四)に「山門十里松間入、泉澗三重洞裏來」(山門 十里 松間に入り、泉澗 三重 洞裏に來たる)という句がある。

「空衢」「衢」はもと四方に通ずる道。大通り。「空衢」で人通りの絶えた道をいう。

用例がほとんど見当たらないことばで、張籍以前の例としては、『真仙体道通鑑』に引く「葛玄空中歌」三首其三に「華景曜空衢、紅雲擁帝前」(華景 空衢に曜き、紅雲 帝前に擁す)という例を見るのみ。唐詩においても、他には二例のみで、韓愈の「送無本師歸范陽」(『繫年集』卷七)に「擗颯攪空衢、天地与頓撼」(擗颯 空衢を攪し、天地 与に頓撼)といい、施肩吾の「少年行」(『全唐詩』卷四九四)に「醉騎白馬走空衢、惡少皆稱電不如」(酔いて白馬に騎り 空衢に走らせ、惡少 皆な稱す 電も如かず)という。

9・10 白麻詔下移相印、新堤未成旧堤尽

〔白麻詔下〕宰相の罷免等の重大な詔については、白麻が用いられた。唐の韋執誼の『翰林院故事』(知不足齋叢書)に「其白麻皆在此院、自非国之重事・拜授将相・德音赦宥、則不得由於斯」(其の白麻は皆な此の院に在り、国之重事・将相を拜授・德音赦宥に非ざる自らは、則ち斯に由るを得ず)という。

「白麻」は張籍以前の詩には用例が見えず、同時代の元白に至って例が見られるようになる。白居易の「新樂府五十首」其三十一「杜陵叟」(一五四)に「白麻紙上書德音、京畿尽放今年稅」(白麻紙上 德音を書し、京畿尽く放す 今年の稅)というのは、その一つである。

張籍の用例はこれのみ。

〔移相印〕「相印」は宰相の印、それを「移」すというのは宰相の交代をいう。

「相印」は古く『戦国策』秦策一に「趙王大悦、封為武安君、受相印」(趙王大いに悦び、封じて武安君と為し、相印を受く)という例などがある。詩における用例は、「丞相印」という例を除けば中唐から見られるようで、武元衡の「元和癸巳、余領蜀之七年、奉詔徵還、二月二十八日清明、途經百牢關、因題石門洞」(『全唐詩』卷三一六)に「昔佩兵符去、今持相印還」(昔兵符を佩びて去り、今 相印を持して還る)というなどの例がある。

張籍にはもう一例、「酬杭州白使君兼寄浙東元大夫」に「相印暫離臨遠鎮、掖垣出守復同時」(相印 暫く離れて遠鎮に臨み、掖垣 出でて守たるに復た時を同じうす)という。長慶四年(824)の作で、元稹が長慶二年に宰相を辞め、白居易が杭州刺史となり、元稹が翌年秋に浙東觀察使・越州刺史となつたことを背景とした句である。

〔新堤未成旧堤尽〕新しい沙堤ができあがらぬうちに、もう古い沙堤はなくなつてしまつた。

「新堤」は孟浩然の「和张判官登萬山亭、因贈都督韓公」(『全唐詩』卷一六〇)に「旧徑蘭勿剪、新堤柳欲陰」(旧徑 蘭剪る勿れ、新堤 柳陰あらんと欲す)という用例が見えるのみ、ただし沙堤ではなく川の堤のようだ。「旧堤」は用例未見。張籍の例もこの例のみ。

【補】

この詩に関して最も問題となるのは、何を詠じているかということであろう。諸注の意見も一致しておらず、あるいは裴度の宰相就任を詠ずるとし、あるいは逆に罷免を詠ずるとする。罷免を詠ずるとしても、裴度に代わつて不満を述べているとするものがある一方で、陳注は白居易の「官牛」を引いて「籍の詩の意 此と同じ」といい、末二句に注して、「籍の樂府の語の諷刺有る者、多く此の類なり」といい、どうやら裴度を批判したものと捉えているようである。

裴度は当時の文人たちの庇護者であり、張籍の知友である韓愈・劉禹錫らとも関わりが深い。張籍自身、裴度の庇護を受けており、詩のやりとりもある。もし就任を詠ずるとすれば、最後の二句はまるで前の宰相を蹴落として就任したように見えよう。

罷免を詠じながら批判するというのも、裴度と張籍の深い関係を考えれば当たらないようにも思われるが、沙堤の描写の部分に見える「息歌吹」「行者避」「惟空衢」といった表現は、宰相の傍若無人ぶりを示しているように見えなくもない。裴度と張籍が心やすい関係であれば、批判的な詩も受け入れてもらえるとの見通しがあつて作つたとも考えられよう。

ただ、裴度の罷免に関して韓愈らが作つた詩には批判の意図は認められない。ここでは、裴度のために罷免の不満を詠じて慰めたものと解しておいた。沙堤の描写は、宰相の権限の大きさを示したものであり、また、人々が宰相として慇懃な態度で接していたことを描写したものと見えよう。最後の二句

は、裴度がその大きな権限を失つたため、人々の態度が一変し、さつさと沙堤を崩してしまうことをいうのではないだろうか。

以上のように、裴度が宰相を罷めたことを背景にしていると考えると、この詩の制作時期は、

- ① 元和一四年九月に宰相を罷めて河東節度使になった時
- ② 長慶二年六月に宰相を罷めて尚書左僕射となつた時
- ③ 大和四年九月に宰相を罷めて山南東道節度使になった時

の三つの可能性がある。第三の可能性については、張籍の最晩年と思われるので、除外してもよいかもしれない。この詩の末尾の二句は、慌ただしい退任を表現しているともとれるので、あるいは三月に宰相となつて六月に罷めた長慶二年の状況を反映したものかもしれない。

(橋)